
眠れ！ウルトラマン

ながいわかれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れ！ウルトラマン

【Nコード】

N2891N

【作者名】

ながいわかれ

【あらすじ】

人類を守るためにM78星雲から、地球に帰って来たウルトラマン。しかし、無力なMAT^トに対し不信感が芽生えてきた……。この物語はそんなおりの、新隊長就任後から始まるのである。

高知行203便(前書き)

この物語を、初代スタビ会長R氏に捧ぐ

高知行203便

郷 秀樹の中に小さな疑心が生まれていた。

次々と出現する怪獣を倒すのは、MAT^{マト}ではなく、この身を削り傷つきながら闘う・・・私、ウルトラマンなのだ。
それは、人間に不信感を抱いた時に、郷 秀樹の心に暗鬼が生まれるかも知れないといった、恐ろしき疑心であった。

「郷、ちよつと来い。」

伊吹は椅子を回転して、郷の方に向き直って言った。

「はい。何でしょう隊長。」

郷は椅子から立ち上がった。

ここは、MAT本部の作戦室。暗黒怪獣との戦いを終えた、ささやかな休息の午後の事であった。

「実はな郷・・・。」

伊吹は郷の肩を片手で叩きながら言った。

「お前、見合いでする気はないか・・・?!。」

「え””！見合いですか!?!。」

あまりにも郷の声が大きかったので、他の隊員たちが一斉に振り向いた。

伊吹は郷から離れ、作戦室の中を歩き回りながら話した。

「見合いと言つても、そんな堅苦しいものじゃない。地球防衛庁第参幹部室の、司令長官^{みくわ}は私と同期であり親友だ。

その姪御さんに、理恵さんという22歳の可愛らしいお嬢さんがい

る。その娘がだな、郷に会いたいそうさ。」
「ちよつと待つて下さいよ隊長……。」
郷の頭に坂田アキの笑顔が浮かんできた。
「隊長、続きをどうぞ……。」
と、上野がニヤニヤしながら言った。
「勝手な事を言わないで下さいよ、上野隊員！」
「俺たちも聞きたいよなあ、なつ、南。」
岸田が南に同意を求めた。
「私も聞きたいわ。」
南の代わりに丘が答えた。
「それ見る郷！みんな聞きたいんだ。」と、上野が勝ち誇ったように言った。
「静かに！！」
伊吹の声が飛んだ。
「その娘がだな郷。今日の三時ごろMATを見学がてら、お前に会いに来る事になってるんだ。」
郷は腕時計に目をやった。
「冗談はよして下さいよ、後一時間で3時ではないですか?!」
「会つてやれよ、色男。」
岸田が口を挟んだ。
「会つたら、何か不都合な事でもあるのか?」
伊吹は探るように聞いた。
「そゝかお前、坂田さんの妹さんに惚れていたんだな!？」
今まで黙つて聞いていた南が、笑いながら言った。
「違いますよ、南隊員……。」
「じゃあ、任せたぞ郷！」
伊吹は作戦室の電話に手を伸ばした。

”はい、第参幹部室竹森です。”

「私はM A Tトリスの伊吹だが、三沢を頼む。」

” 暫くお待ちください。”

伊吹は受話器を持ったまま、郷の方をむいて片眼を瞑って見せた。

” 三沢だが・・・。”

「ああ、三沢か例の件だが、取りあえずM A Tの娯楽室まで、連れて来てくれるか?!」

” 郷君の方は良いのかね?”

「二つ返事でOKだ。うん、うん。M A Tの中でデートするそうだが、そう云う事で・・・。」

受話器を置くと、伊吹は茫然と立っている郷の肩をポンポンと叩きながら、

「理恵さんを頼むぞ!」

と言って、作戦室を出て行くのであった。

「隊長! ××山付近から、怪電波が出ています。」

午後三時前、丘が叫んだ。

「よし、上野と岸田はマツトアローでパトロールに出動!」と、伊吹の声が飛んだ。

「了解!」

二人は異口同音に言って、ヘルメットを抱えて作戦室を出て行った。岸田と上野は通路を足早に歩いていた。すると前方から二人の男女が歩いて来るのが見えた。

岸田は上野に目配せをし、上野は軽く頷くのであった。

すれ違いざま、岸田、上野両隊員は敬礼をして二人の後姿を見送った。

「・・・理恵さんは防衛大学の四年生だと聞きましたが。」

娯楽室のテーブルを挟み、郷と理恵が向かい合って座っている。三沢司令長官と伊吹隊長の姿はなく、二人だけの沈黙を破り、郷が言った。

「はい。」

「防衛大学は厳しいでしょう?!卒業後は地球防衛庁に入るのでか?」

郷の問いかけに、理恵は女の笑顔を郷に返した。

「そろそろ、MAT基地の中を案内しましょうか!？」

「私、あの時近くにいたんです・・・。」

「えっ!？」

椅子から立ち上がりかけた郷だが、理恵の言葉に腰を下ろした。

「当時民間人だったあなたが、誰よりも早く少年を助けに行った時の事です。私たち防衛大学の情報処理科は課外研修の為に近くに来ていたのです。・・・あなたは命を落とし、そして蘇^{マツト}ってMATに入隊した。あの日以来、あなたは私の中で英雄なんです。」

理恵はそう言うと先に立ちあがり顔を赤らめた。

「アローの発着場ですごいんですね。」

「見にくかったでしょう、見学はあそこまでが限界なのです。」

娯楽室を出て、理恵はMATの中を案内してもらっている。

「次は、作戦室でものぞいて見ますか?!」

「え〜!良いのですか?」

「ちょっとだけなら・・・。」

郷は悪戯っぽく笑った。

郷と理恵は通路を並んで歩いている。時折、通信・整備士たちとすれ違っ^{さんそん}て行く。

「高知県の山村にある、地球防衛センター高知支部をござんじですか?」

作戦室に向かっている途中理恵が聞いた。

「いいえ、知らないですけど・・・そこが何か?!」

「主に怪獣たちの生態を研究しているところなんです。まっすぐ先を見たまま理恵は言った。

郷は理恵が言った言葉の真意が分からず、理恵の横顔を見つめた。

理恵は郷の顔を見ずに続けた。

「そのこの所員に、私の幼馴染の男性ひとが居るのですが、その人が、”

一緒に働かないか”と言ってくれているのです。」

「防衛大学だいがくを辞めてですか?」

「云え、あつちで働きながらも、防衛大学だいがくは何とか卒業出来そうなんです。」

理恵は初めて郷の顔を見つめて話した。

「それは良かった。しかし、後もう少して卒業でしょう。そんなにあわてて行かなくても・・・。」

「”一緒に働かないか”と云うのは、恥ずかしがり屋の彼のプロポーズの言葉なんです。私を手の届くところに置いていたいのでしょう。」

・・・一週間後、羽田から飛行機で高知へ旅立つ予定なのです。」

「そうなんですか!？」

郷は言葉が思い浮かばず、理恵の次の言葉を待った。

理恵は郷の顔から眼をそらして話し始めた。

「正直、私は迷いました、私の心の中にあなたがいたからです。私はあの日以来ずっとあなたを見ていました。」

そこで、理恵は一度言葉をきり郷の顔を見つめた。

「坂田アキさんは素敵な女性ひとですネ・・・。」

話は変わりここは作戦室の中である。

”ビーー!ビーー!”

郷と理恵がまだ娯楽室にいる頃、警報音が作戦室に響いた。

「はい、こちらM A T 作戦室。」 丘が無線のマイクを取った。
”こちら宇宙ステーションV1、未確認飛行物体発見。こちらの呼びかけにも応答なし、日本の××山に向かっている模様。ただちに出撃態勢に入れ・・・。”

「了解！」と、丘は言ってマイクを切った。

「よし私と南は出撃して、岸田・上野両隊員と合流する。丘隊員は、作戦室に残って待機していてくれ。」

伊吹はそう指示を出すと、ヘルメットを抱えて南とともに作戦室を出て行った。

「こちら丘、岸田・上野両隊員応答願います。」

丘は無線のスイッチを入れた。

”こちら岸田、ただいま現場付近の上空に到着。何かあったのか？”

丘は先ほどの出来事を、手短かに話した。

”了解！警戒しながら、隊長機の到着を待っている。”

丘は報告を済ませると、作戦室の中を歩き回っていた。

郷に、この事態を連絡するか迷っているのである。

隊長は何も言わなかったし、今の時点では（郷に）連絡はいらないだろう。

しかし、丘隊員の中の”おんな”が、ザワザワと丘の理性を侵食しているのである。

”郷隊員に、連絡したらどうなる？！彼の事だから、理恵を置いて飛び出して行くに違いない・・・。”

”えっ・・・私が理恵さんに嫉妬・・・！？”

丘は首を二・三回振り理性を取り戻した。

作戦室のドアが左右に開き、這入って来たのは郷と理恵であった。

「郷隊員、作戦室は駄目ですよ。」

丘はびっくりしながら言った。

「分かっているよ、すぐ出て行く・・・あれ、みんなは？！」

郷はあたりを見回しながら聞いた。

丘は郷の顔を凝視して、口を開きかけた時。

”こちらマツトアロー伊吹。丘隊員聞こえるか?!”

作戦室に伊吹隊長の声が轟いた。

「はい、丘です。」

丘は無線の前に座った。

”丘くんか！？今、円盤と交戦しているところだが、岸田たちのアローの姿がない。何か連絡はなかったか？”

伊吹の声は少しうわずっている。

「いえ、隊長たちを待っている・・・その連絡が最後です。」

”もしかしたら、我々の到着前に撃墜おとされたのかもしれない。”

理恵とともに、作戦室を出かかっていた郷は、立ち止りこのやり取りを聞いていた。

「行つてあげて下さい。」

理恵が心配顔の郷に言った。

郷は理恵を見た。

理恵はにっこりほほ笑んで、同じ言葉を繰り返した。

「皆さんの応援に行つてあげて下さい。・・・私は一人で帰りますから・・・。」

理恵は自分勝手な賭けをした。

”もし郷さんが私の言葉の裏を察して、私の側に居てくれたなら、来週の高知行きはキャンセルして、少なくとも大学を卒業するまでは、郷さんを見守つて行こう。”

身勝手な賭けだが、理恵は郷の次の言葉を待った・・・ある意味自分の人生を賭けたのである。

郷はまだ理恵を見つめている。

「岸田隊員応答願います・・・。上野隊員聞こえますか？」

作戦室の中は、丘の岸田・上野両隊員を無線で呼んでいる声が虚しくこだましていた。

「すいません。」と、郷は言うのが早いか、ヘルメットを抱え作戦

室を飛ぶように出て行った。

理恵は作戦室から遠ざかって行く、郷の足音が聞こえなくなっても、暫くその場に立ちすくしているのがあった。

円盤に操られていた巨大ロボットは、伊吹・南のマトアローとウルトラマンの波状攻撃の前に倒れた。

宇宙に逃げようとした円盤も、ウルトラマンのスペシウム光線の前に大爆発をおこしたのであった。

岸田と上野の乗ったマトアローは、マトビハイクルで出動した郷に××山付近に不時着した状態で発見され、両隊員は気絶していたものの命には別条はないとの事である。

そして一週間の日にちが流れた。

「隊長！只今東京A地区のパトロールから帰りました。」

「異常ありませんでした。」

郷と南が伊吹に敬礼をした。

「御苦労！郷は明日休暇だったな。」

「その事で、隊長にお願いがあるので……。」

郷は伊吹の眼を見つめながら、南には聞こえないように続けた。

「……明日……その時間……司令官……しようか？」

伊吹は少し驚いた表情になったが、口元にうつすらと笑みを浮かべながら言った。

「分かった、聞いておこう。」

郷は敬礼して作戦室を後にした。

ここ羽田空港のロビーで理恵が搭乗手続きを待っている。

「遅いわね郷さん。」

腕時計を見ながら、見送りに来た母親が言った。

昨夜遅く、三沢から母親に電話があった。郷隊員が先日の償いの為に、せめて理恵さんを見送りに行きたいと言っているから、飛行機の時間を教えてほしいとの事だった。三沢には一応時間は伝えただが。

「きつと道が混んでるのよ。」

理恵は自分に言い聞かせるように呟いた。

「16時30分発の高知行203便に搭乗予定のお客様にお伝えします。地球防衛庁より連絡があり、203便の航路上に宇宙怪鳥が飛来して、ただいまMATと交戦中との事。大変お急ぎのところ誠に申し訳ありませんが、今のところ出発のめどはたっていないので、今しばらくお待ちください。」

何とも形容し難いドヨメキが乗客たちの間で起こった。

「出発遅れるみたいね、郷さんきつと間に合うわよ。」

母親の言葉に理恵は力ない笑みを返した。

「来るわけがない、宇宙怪鳥が現れたのだ。私の見送りよりMAT隊員としての使命を果たすだろう。」

「さようなら、私の心の中の英雄……。」

理恵はポツリと呟いた。

30分が過ぎ乗客たちが騒ぎかけた頃。

「高知行203便に搭乗予定のお客様にお伝えします。大変ご迷惑をおかけしましたが、宇宙怪鳥はMATとウルトラマンによって退治されました。これから搭乗手続きを開始いたします。お客様には大変ご迷惑を……。」

「おっつ!!！」

という歓声が乗客から上がった。

「お母さん、もう行くね。」

「気を付けて行ってらっしゃい。」

母親は娘の後姿をいつまでも見送っていた。

高知行203便は定刻を45分遅れて離陸した。高知までは凡そ一時間二十五分である。

飛び立って二十分もたつたらうか、理恵が雑誌に眼を移していた時。

「あつ、ウルトラマンだ！」

乗客の一人が叫んだ。

「すごいなあ。」 「かつこいいなあ」

他の乗客たちも口々に言い合っている。

「ウルトラマン、誰かを見送っているみたいよ。」

理恵も雑誌から眼をあげて外を見た。

なるほど飛行機と平行にウルトラマンが飛んでいる。

理恵はウルトラマンと眼があつたような気がした。

「郷さん・・・!？」

一瞬!

ウルトラマンの顔が郷の顔とダブって映った。

理恵は二・三回首を振ると、もう一度ウルトラマンを見た。

しかし、ウルトラマンは一つの点となって、空の彼方へと消えて行ったのであつた。

眠れ!ウルトラマン 前章 高知行203便

完)

【point】

郷は逃げていた。

後ろからはゼットンが追いかけて来ている。

「ゼツ・トン・・・！」

「ゼツ・トン・・・！」

”このままでは、殺されてしまう。早くウルトラマンにならなければ・・・。”

郷は立ち止り、ゼットンの方に向き直り右手を挙げた。

”何故だ！何故変身しない！！”

「ゼツ・トン・・・！」

一兆度の火球が放たれた。

ここ富士五湖上空では、正体不明の円盤二機と、郷と上野の乗ったマトアローが交戦していた。

「行きますよ、上野隊員！」

と言って、操縦しているマトアローをキリモミさせて、レーザーを乱射した。

二機の円盤のうち、一機は爆発炎上し、もう一機は煙を吐きながら墜落して行く。

「よし郷！とどめだ。」

上野が叫んだ。

「はい、上野隊員。」と郷は言って、レーザービームの引き金を引こうとした。

その時、郷の頭の中に懐かしい声が響いた。

”待ってくれ郷・・・私だ、モロボシ・ダンだ。”

「兄さん?!」

郷は、レーザービームの引き金から手を離した。

円盤はかろうじて態勢を立て直して、富士の樹海の中に消えて行った。

「馬鹿! 郷なぜ撃たないんだ。見失ったじゃないか!」

「アツ・・何が・・。」

郷は先ほど頭の中に直接響いたモロボシ・ダンの声に頭が一杯であった。

上野はそんな郷を一瞥しながら、アローの無線機を取った。

「こちら上野。マツト本部応答願います。」

「はい丘です。」

上野は円盤一機に逃げられた事を話し、もう少し搜索してから基地に帰る事を告げた。

「あゝあ、逃げられちゃったよ。」

上野は作戦室に入ってヘルメットを乱暴に置いた。

「すみません上野隊員。」

郷は恐縮して言った。

「あれ、隊長は?」

上野は、郷の言葉を無視して、他の隊員たちに聞いた。

「先ほど、佐竹参謀に呼ばれて、参謀室に行ってるわ。」

丘が答えた。

「それにしても、どうして円盤に逃げられたんだ?!」

南が上野と郷を見た。

「郷が撃たなかったんだ、あそこで撃っていればとどめを刺せたんだ。」

上野は郷を見た。

「すみません上野隊員。」

郷はまた同じ言葉を繰り返した。

「お前この頃おかしいぞ・・・ヤル気があるのか!?」
ついに上野の怒りが爆発した。

「おい、おい、上野!? ちょっと言いすぎだぞ!」

岸田が口を挟んだ。

「・・・もう一度パトロールに行つて来ます。」

郷はヘルメットを乱暴に抱え作戦室を出て行った。

「おい郷! 勝手な行動は規律違反だぞ、戻つてこい!」

南が二・三步追いかけた。

「ほつときなよ! 郷は俺を馬鹿にしているんだ。」

上野の怒りは当分収まりそうにない。

「郷はどうした?」

参謀室から戻つて来た伊吹は、作戦室を見回しながら言った。

「ビハイクルでパトロールに行つてます。」

南が答えた。

「そうか、何かあったのか?」

南は今までの出来事を手短かに説明した。

伊吹は難しい顔で、暫く作戦室の中を歩き回っていたが、ゆっくりと隊員たちの顔を見つめた。

「我々M A T^{チーム}隊員は、チームワークが不可欠だ。今日の事は不問に付すが・・・これからは、隊員全員が一つに成つて行動せよ!」

「了解!」

南・岸田・丘・・・上野が姿勢を正し、伊吹に敬礼をした。

「佐竹参謀に呼ばれた件だが、M A T^{チーム}ロンドン支部で重大な事件が発生した。」

伊吹は敬礼したままの隊員たちに向かって話しだした。

「どうしたの郷さん？顔色悪いわよ。」

パトロールの途中に突然やって来た郷に坂田アキは心配顔で聞いた。

「この頃、毎夜同じ夢で魘うなされて、寝てないんだ……。」

「疲れているのよ。でも、郷さんが魘うなされる夢って……？」

「ゼットンに追いかけて、ウルトラマンに変身しようとするのだが、変身できなくて最期はゼットンが火の玉を放ったところで目が覚めるんだ。」

郷はそう言った後、アキを見つめた。

アキは最初驚いていた顔をしていたが、徐々に笑顔へと変わって行った。

「変な夢ね、どうして郷さんがウルトラマンになろうとするの……？」

郷は黙ってアキの顔を見つめ続けてポツリと呟いた。

「ウルトラマンの、心の恐れが生み出している夢かもしれない。」

「えっ?!」

郷の言った言葉の意味が理解出来ずに、アキは首を傾げた。

その時、ビハイクルの無線が鳴った。

「はい、こちら郷。」

「郷隊員、富士山麓に怪ロボットが出現しました。そのままビハイクルで直行してください。」

「了解！」

郷は無線を切ると、ビハイクルに飛び乗りアキに言った。

「ごめんアキちゃん。また来るよ……。」

アキは遠ざかって行く郷を見送りながら、何か心の中に引っかかる物を感じるのであった。

”郷隊員。走行しゅうしんながら聞いてください。”

ビハイクルの無線から丘の声が聞こえてきた。

”MATマトロンドン支部でマーチン隊員がヤン隊長を射殺して、最終アーマ”

爆弾を搭載していたスペースアローで逃亡しているそうです。なお MAT^{マット}には非常事態宣言レベル4が発令されています。”

そう告げて無線は切れた。

「・・・人類は自らの手で滅びるのかもしれないな・・・。」

郷は呟き、アクセルに力を込めるのであった。

「巨大なロボットだな。」

郷は二機のアローの攻撃にもびくりともしない、ロボットを見た。

「隊長・・・郷です。今到着いたしました。」

「郷か、このロボットは、何者かに操られているみたいだ。そちらからも調査してみてください。」

「了解！」

郷は電波探知機を片手に、富士の樹海を目指して歩き出した。

20分も歩いたであろうか、電波探知機に反応があった。郷は用心深く、反応する方向へと歩いて行く。

樹木の生い茂った中、小さな池があり、その畔で妖しげな機器を操作する男がいた。

「やれ、ガイガン。MAT^{マット}を叩き潰せ！！」

その声はまさしくモロボシ・ダンであった。

郷は電波探知機を置き、マットシートを右手にかまえた。

「にいさん・・・！？」

その声に、驚いたように振り向いた男は・・・モロボシ・ダンであった。

「何故だ！ウルトラセブンとして、地球を守って来たにいさんが、どうして地球を攻撃するんだ。」

「郷・・・私は地球の為に闘い、そして、傷つき倒れた。ある隊員はそんな私を無能だと罵り、防衛軍の面汚しだとまで言った。この闘いは、そんな地球人に対する復讐なんだ。」

ダンはそう言うと、妖しげな機器をまた操作し始めた。

郷は暫くマツトシユートを片手に立ちすくしていた。

「・・・お前もいずれ、人間のエゴに裏切られる・・・。」
立ちすくしている郷に、ダンの背中が哀れんでいた。

その時。

巨大ロボットの光線がマツトアローをとらえた。

尾翼から煙を吐きながらアローが墜落して行く。

「ハハハハ・・・もう一機だガイガン。M A Tを全滅させる！」

郷の眼にアローから脱出する隊員の姿が映った。

「違う・・・にいさんじゃない。」

郷は首を横に振りながら、マツトシユートをダンに向けた。

「やめる郷！兄を撃つのか・・・。」

そう言うが早いか、ダン是不意を突いて光線銃を郷に発射した。

郷はその動きを読んでいたかのように、横っ飛びによけながら、マツトシユートの引き金を引いた。

銃弾は正確にダンの眉間を貫通して、スローモーションのように池の中に転落して行った。

郷はゆっくりと池の畔に近づいて行く・・・。

池の中に浮かんでいたのは、グロテスクな顔をした宇宙人であった。郷は無言で妖しげな機器を撃った。機器が爆発音と共に破壊されると、ガイガンと呼ばれていた巨大ロボットは、天空に両手を挙げた格好で動きを止めた。

郷はそれを確認すると、静かに歩きだした。

”・・・お前もいずれ、人間のエゴに裏切られる・・・。”

郷はダンに化けていた宇宙人の言った言葉が、自分を惑わすために言った言葉だと理解していても、何故か頭の中を駆け巡って離れないのであった。

ウルトラマンの疑心は、確実に郷の心の暗鬼へと変わりつつあった。

u
b
t
】

眠れ！ウルトラマン

中章

】
o
o

(完)

外伝 夢の彼方へ

「ねえ、貴方あなたの夢を聞かせてくれる?!」

「またかあ?」

「早く言つて……よ。」

「地球の支配者になる事だよ……。」

「貴方あなたの夢を聞いていると、幸せな気分になるわ。」

そう言つて女は笑つた。

自分のアパートの一室で、女は男に寄り添いながら、目を閉じて二人が出会つた頃を思い浮かべていた。

今から一年前の梅雨も末期を迎えた頃に、正保真里しょうほまこと（23歳）は降りしきる雨の中で、その不思議な男に会つた……いや、会つたというより助けたのである。

「マリアまた明日ね、暗いから気を付けて帰るのよ。」

夜8時頃、看護師の仲間たちと別れて電車を降りた。

友人たちは自分の事を、正保がセイボと読めることから、聖母マリアからもじつて”マリア”と呼んでいる。

駅前に立ち、真里は降りしきる雨を見つめながらタクシー乗り場を見た。

「歩いて帰ろう……。」

そう言つて真里は、傘をさしながら小走りに歩きだした。

タクシー乗り場には長蛇の列が出来ており、真里は自分のアパートまで、三十分近く歩く方を選択したのであつた。

歩きだして暫くして、地球防衛庁所属のMATマトの戦闘機が、この街を低空で旋回しているのに真里は気づいた。

”何かあったのかしら?!”

真里の兄も地球防衛庁の隊員であった。しかし昨年、地底怪獣との戦いで戦死したのである。兄の死で真里は天涯孤独となり、一事は生きる希望を失いかけていたが、今では、兄の親友であり幼馴染であるM A T^{マツト}の上野隊員が、いい意味での兄に成ってくれている。

真里は立ち止り、雨が降りしきる夜空を見上げた。

マツト機は暫く旋回していたが、いつしか闇夜の上空へと消えていった。

”近道を帰ろう・・・”

真里は公園に足を踏み入れた。

真里が住むアパートはこの公園の裏手にある。この、大きな公園の遊歩道を通れば、五分は早くアパートに着く、公園には街灯も少なく、いつもなら多少時間がかかっても、明るく人通りの多い幹線道路を帰るのだが、傘を差しているとはいえ、真里は早くシャワーを浴びて冷えた身体を温めたかった。

”やっぱり、来なければ良かった。”

真つ暗な公園の遊歩道を歩いている真里に、後悔の念が芽生えてきた。

”まってくれ・・・”

何処からか声が聞こえたように思えて、真里は立ち止り耳を澄ませた。

雨の音だけが、真里の研ぎ澄まされた五感に響いている。

「気のせいか・・・!?」

真里は声に出して呟いた。

「行かないでくれ・・・」

今度ははっきり聞こえた。

”誰かがいる・・・”

真里は逃げ腰になった。

「怪しい者じゃない。」

遊歩道の横の築山の茂みから、一人の男性が出て来て真里の前で崩れ落ちた……。

真里は辺りを見回したが、通行人の姿はない。

恐る恐る、雨にうたれて気を失っている男を見た。

歳の頃は三十前後、怪我と寒さで死にかけているように思えた。

「救急車を呼ばなければ……。」

真里は我に返って、ハンドバックの中の携帯を探した。

「やめてくれ……どこか、雨のあたらない場所に連れて行ってほしいだけだ。」

男は気が付きあわてて真里を止めた。

「その右肩ひどい打撲よ。それに、衰弱も激しいし、病院に行かなければ駄目よ。」

「……貴女は医者なんですか？」

「いえ、看護師なんです。あなたの名前は？住所は何処？」

真里の身体から恐怖心は消えていた。

男は苦しそうな顔で真里を見つめていたが、首を横に振りながら言った。

「何も思い出せない……。」

男はどうやら記憶を無くしているらしい。

今考えれば信じられない行動を真里はとった。

みず知らない男性を自分のアパートに連れて行き、怪我の手当をしたのである。

その後男は、三日三晩真里の部屋で眠り続けたのであった。

それが、正保真里と不思議な男“カイク”との最初の出会いであり、現在では、真里は“カイク”に心を許しきっている。

「何を考えているんだ?!」

「カイクと出会った時のことよ。」

真里は男の言葉に、瞑っていた目を開けて笑った。

二人は寄り添いながら、アパートの窓から夕陽に染まった景色を見ている。

”一年以上たっても、私はこの男が何をしているのか、名前しか知らない。ふらりとやって来ては夢を語って行く・でも、私はそれだけで幸せな気分になる。”

「マリア・・・一緒に住んでもいいか?!」

目は夕陽を見つめたまま、ポツリとカイクが言った。

「・・・・・・・・・・。」

真里は驚いてカイクの横顔を見つめた。

「ダメか?」

真里の大きな瞳から涙があふれてきた。

「ううん、嬉しいの・・・その言葉をずっと待っていたわ。」

カイクは黙って真里の肩を抱きしめるのであった。

ここは都内にあるパブスナック。

一人の女性がステージで歌っている。

歌が終わり、拍手のなか女性は自分のテーブルへと戻って行った。

「マリア上手いじゃないか・・・それにしても、急に連絡があつてびっくりしたよ。」

MATトメの上野は、水割りのグラスを手のひらでもてあそびながら、笑顔を見せた。

「ごめんねお兄ちゃん・・・どうしても聞いて貰いたい事が出来たのよ。」

真里は兄の親友であった上野の事を”お兄ちゃん”と呼んでいる。

「なんだい、看護師の仕事がうまく云ってないのか?!」

上野は親友の正保の妹である真里の事を、心から心配していた。

「ううん、私ね好きな人がいるの。今、その人と一緒に暮らしているのよ。」

上野は一瞬鳩が豆鉄砲をくらった顔になった。

「一応お兄ちゃんには、報告しないとね。」

真里はそんな上野の顔を見ながら、悪戯っぽく言った。

「・・・どんな男だ!」

上野は心配だった。

マリアはちよつと天然ポイところがある。

”騙されていなければいいが・・・”

「大丈夫よお兄ちゃん!彼は優しい人だから、出来もしない夢ばかり見ている、ちよつと人間離れた変わった人だけどネ。」

真里は言つて、腕時計に目をやった。

「あつ、もうこんな時間だ。今夜はありがとう・・・お兄ちゃん顔色悪いわよ。疲れているのなら無理は禁物よ。」

そう言つと真里はあわただしくパブスナックを出ていった。

「相変わらずだな。」

上野は苦笑いしながら、二杯めの水割りを飲みほした。

真里はタクシーを降りると、アパートの階段を駆け上がった。

「ただいまあ〜!」

行き良いよく部屋に入ると、カイムの難しい顔がそこにあった。

「大事な話がある。」

カイムは言つて、真里を自分の前に座らせた。

「マリア、僕は君に隠していた事がある。」

「何・・・?」

真里は怪訝な顔をした。

「僕はね地球人ではないんだ。カイク星から、地球侵略の為の調査に派遣された宇宙人なんだ。」

「えっ……！」

二人は真剣な顔で見つめ合っていた。

” プツ・ハハハハ・ツ。”

二人はどちらからもなく笑いあった。

「もう、一瞬信じたくない。」

真里はすねて見せた。

「迫真の演技だったろう。実は仕事を決めて来たよ。後は、この保証人の欄にマリアがサインしてくれば来週から採用だよ。」
そう言つて、カイクは一枚の紙を取り出した。

「幸せよわたし……！」

真里はカイクの胸の中で、静かに眼を閉じた。

” ……俺はマリアの為に故郷（カイク星）をすてる……”

ここはマット作戦室。

隊長はじめ全隊員が席に着いていた。

「プリズ魔との戦いで疲れているところ、集まって貰ったのは他にもない。」

そう言つて伊吹は、隊員たちを見回しながら話を続けた。

「今日、都内R地区の一般市民から一枚の写真が地球防衛庁に送られて来たんだが……。」

伊吹が眼で丘に合図をすると、丘は立ち上がりスライドをセットした。

R地区にある、公園の築山の頂上を撮った写真であった。

「円盤だ！」

という声が隊員から上がり、丘は自分の席に着いた。

「この写真は、毎日この公園で愛犬が築山に向かって吠えるものだから、早朝愛犬の散歩がてら、主婦がデジカメで数枚撮った写真のうち、一枚に映っていたらしい。」

「何故一枚だけに？」

南は不審がつて聞いた。

「これは推測だが、朝日と空気中の朝露が、寒気により微妙にマッチして一枚だけに眼に見えない円盤が映ったんだろう。」

伊吹は言つて、また丘に目配せをした。

丘は立ち上がり、もう一枚の写真をセットした。

「これは・・・！」と、上野。

「そう、昨年の梅雨時期に不穏な電波をR地区でキャッチした時のアローから撮った一枚の写真だ。」

そう言つて伊吹は隊員たちを見回して話を続けた。

「この時は私はいなかったが、丘くんが覚えていて私に持って来た。」

「これは、俺と上野が出動した時に撮ったものだ。」

岸田が上野を見ながら呟くように言った。

「数百枚のうち、一枚だけに映っていたのよ。」

丘は岸田と上野を見ながら言った。

「円盤らしきものは映っていないが・・・。」

他の隊員たちも身を乗り出すように写真を見つめている。

丘は立ち上がり、主婦が撮った円盤が映っている個所と同じところを拡大した。

「お〜！」

という声が他の隊員から上がった。

「分かったかね！この夜は激しい雨が降っていた。その雨が円盤がいる所だけ、円盤の形で映っていない……。」

伊吹は説明した。

「成るほど、見えない円盤が、雨の所為せいで何も無い円盤の形で映っているのか!？」

南は変な感心をした。

「一年以上も、この円盤は何をしているんだ?!」

今まで黙っていた郷がポツリと呟いた。

「そこで、この会議だ。」

伊吹はそう言って全隊員を見回した。

「隊長！攻撃しましょう……。」

上野は気色ばんで叫んだ。

「ほかの隊員ものたちは？」

「まずは、コンタクトをとってみた方が良いと思いますが!？」

暫くの沈黙の後、郷が言った。

「郷！俺に何か恨みがあるのだったら……はっきり言え。」

上野は郷を睨んだ。

「僕はただ、何か訳があつて地球に来た可能性もあるんじゃないかと……。」

「他人の家の庭に黙って一年以上も居座っているんだぞ、そんな可能性はない!」

上野は嘲笑した。

「何故言いきれるんです。コンタクトを取って見ないと分からないでしょう!？」

郷も口を尖らせた。

上野は口元に不敵な笑みを浮かべた。

「プリズ魔との戦いの時、お前は何処にいた？異星人のウルトラマンでさえ、地球の為に命がけで戦ってくれていたんだぞ!……郷、お前居なかったよな……逃げてふるえていたのか……?!」

「上野！郷！もうやめないか……。」

伊吹は二人を一喝した。

「決を採る。」

静かになった作戦室に伊吹の声が響いた。

円盤を攻撃 岸田 上野 南

コンタクト 郷

棄権 丘

「明日午後零時を待つて、R地区中央公園の円盤らしき物体を攻撃する。以上・・・解散！」

伊吹が全隊員に命令を下した。

次の日の午後零時。

新型冷凍ビームを搭載したマトアローに、岸田と上野が搭乗して基地を飛び立つて行った。

その成果を確認するため、マトジャイロに南 郷両隊員が乗り込み、後に続いたのであった。

アローから発射された冷凍ビームは的確に見えない円盤をとらえた。

”・・・地球人・・・何を！攻撃を止めてくれ。”

見えない円盤からの通信がアローの無線にながれた。

「よし、上野とどめだ。」

岸田は叫んだ。

「了解！」

上野は言つて冷凍ビームのスイッチを押した。

”・・・やめる・・・マ〜リ〜ア〜!!!”

断末魔の声と共に、見えない円盤は炎上して爆発したのであった。

「やった！」

岸田と上野は異口同音に叫んだ。

マツトアローは基地へと急ぎ、ジャイロは燃える公園の消火作業をしていた。

上野の心に言い知れぬ不安が芽生えていた。

” マリア！？確かに断末魔の声はそう聞こえた。”

” 「ちよつと人間離れた変わった人だけどネ。」”

上野の頭の中を、真里が言った言葉が何故か木霊こだまして離れなかった。
。。。。。

数週後のある晴れた日に、上野は休暇をもらい真里を訪ねて行った。
円盤を破壊した時に生じた疑問を打ち消したかったのである。

「そんなはずはない……！」

上野は自分に言い聞かせ、真里のアパートの前に立った。

眠れ！ウルトラマン

外伝 夢の彼方へ

(完)

終章 1 疑心

死闘は終わった！

「アキちゃん、坂田さん・・・俺のためにすまない。次郎君仇は取ったぞ！・・・許してくれ！！」

ナツクル星人、ブラックキングを倒して、宇宙電波研究所に仕掛けてあったサターンZの処理も済み東京は救われた。

ジングルベルが鳴り響く街並みを、クリスマスケーキを片手にアパートに向かう郷の姿があった。

「一番星だ・・・」
空を見上げて郷は呟いた。

”郷さん知ってる？！一番星は幸せな人にしか見えないんだって・・・”

郷の心の中に無邪気に微笑むアキの笑顔が浮かんでは消えていく。

「ルミ子さん今日はありがとう。楽しいクリスマスイヴだったよ。」
郷は村野ルミ子の部屋から出ながら言った。

「私の方こそありがとうとございませう。次郎君、郷さんおやすみなさい・・・。」

村野ルミ子にはっこりほほ笑むと部屋のドアを閉めた。

『うわ～！お前は何者だ。』 郷は飛び起きた。

「夢か・・・！」

郷はため息をつき、起こしていた上半身をまた布団の上に倒した。

「それにしてもリアルな夢だった。」

数日前までは、ゼットンに襲われる夢に郷は魘されていた。今見た夢はそれとは違っていた。

郷とアキがデートをしている夢であった。

二人とも童心に戻って、はしゃぐ遊園地。ラブロマンスの映画。

そして、二人きりのフレンチレストラン・・・。

郷はプレゼントの指輪が入った小箱を握りしめていた。

「渡したい指輪があるんだ。」

” あらたまつて、なあ〜に?! ”

郷は黙って、可愛いリボンのついた小箱をアキの前に差し出した。

” 開けてもいい?! ”

アキは郷の返事を待たずに、中からプラチナの指輪を取り出すと、左手の中に握りしめながらうつむいた。

アキの身体からだが小刻みに震えている。

「僕の気持ちだ。」

感激しているアキに郷は優しく語りかけた。

暫くの沈黙の後。

” ……こんな私でいいの? …… ”

しわがれた声でアキがうつむいたまま聞いた。

郷が頷くのと、アキが顔を上げるのが同時であった。

アキの表情は悪鬼のごとく変わり、顔は醜怪な化け物に成っていた。

「アキちゃん? ……うわ〜!!! ……お前は何者だ! ? 」

郷の叫び声と共に、レストランの照明は消えた・・・。

「郷さん! どうしたの? 」

隣の部屋の村野ルミ子がドアをノックしている。

「大丈夫です。ちょっと怖い夢を見ただけだから・・・。」

郷はドアを開けながら、心配顔で立ちすくむ村野ルミ子に言った。

「もう、びっくりしたじゃない。アパート中に聞こえたかも・・・
可哀そうに次郎君震えているじゃないの。」

村野ルミ子は部屋の中を覗きながら、少し怒ったような口調であったが、その響きには優しさが含まれていた。

次の日。

マットアロー2機と地底から出現した怪獣が交戦していた。

N県山中から出現した怪獣は、行く手にあるものを破壊しつつ北上を続けている。

南と郷が乗ったマットアローが、怪獣の攻撃を尾翼に受けた。安定を失ったマットアローはかろうじて飛行している。

「大丈夫か?!」

アロー2号機からの岸田の声が無線に響いた。

「郷です。操縦桿が重い……このままでは墜落する。」

「早く脱出しろ!」

「了解!」

南はいち早く脱出レバーに手を賭けた。

「郷、脱出するぞ……。」

言うが早いか脱出レバーを引いた。

「こちら郷、脱出レバー故障!不時着します。」

アロー2号機から、助手席の南は脱出したのは確認できた。

「郷!どうした、故障とはどう云う事だ……早く脱出しろ!」

岸田は叫んだ。

郷からの応答はなく、アロー1号機は怪獣に爆弾を放ったのち山間に不時着して行った。

山の奥側からウルトラマンが現れて、怪獣の前に立ち塞がった。

「ウルトラマンだ。」

アロー2号機の岸田と上野が叫んだ。

ウルトラマンとアローの攻撃にも、怪獣は北上をやめようとしなかった。

「この怪獣は、目的があって北上を続けているのかも……。」

上野がポツリと呟いた。

”こちら南！これから、郷を救助に向かう”

アローのスピーカーから脱出した南の声が流れてきた。

「了解！こちらは俺たちとウルトラマンに任せて、郷を頼むぞ。」

岸田は無線を置くと上野を見た。

「行くぞ上野・・・！！」

アローはキリモミしながら、怪獣に光線を乱射した。

ウルトラマンは怪獣の進路に立ち塞がると、身をかがめて手をクロスさせた。

”この怪獣は何かおかしい・・・。”

ウルトラマンは怪獣の眼を見つめ、クロスしていた手をゆっくりとはなしていった。

「どうしたウルトラマン・・・何故スペシウム光線を撃たない！？」

マツトアローの中で、上野が叫んだ。

「上野。怪獣の足を狙え、これ以上進ませるな！！」

「了解！」

アローの足への集中攻撃の前に、怪獣の前足は傷つき、その巨体は崩れ落ちた。

ウルトラマンは、仁王立ちのまま怪獣を見ている。

必死に怪獣は、傷つき折れ曲がった前足で立ち上がろうとしていたが、それは・・・虚しい努力であった。

「やった！俺たちが怪獣の進撃を止めたぞ。」

岸田が上野に笑顔を向けた。

「やりましたネ岸田隊員。」

上野も笑顔を返した。

怪獣は涙を流しながらウルトラマンを見ていた。

ウルトラマンには、この怪獣が何らかの目的で北上していた事が感じられていた。

しかし、アローの攻撃により前足が傷つき動けなくなり、ウルトラマンに殺してほしいと哀願しているような、涙のように思えてならなかった。

ウルトラマンは、再びゆっくり両手をクロスさせ・・・スペシウムを放った。

ここ、Y県山中にあるホテルでは、三迫家と大村家の結婚披露宴がたけなわであった。

「先程地球防衛庁から、地底怪獣がこちらに向かっているとの連絡がありました・・・」

司会者がマイクを取った。

一瞬。

水を打ったように会場が静かになった。

「いや、心配は御無用です。怪獣はウルトラマンのスペシウム光線により、倒されたとの報告が今程入って来ましたので、安心して宴をお楽しみください。」

若者たちの歓声が静まるのを待つて、司会者は続けた。

「それではここで、新郎の会社の上役である竹森様に、スピーチをお願い致します。」

司会者の前の席に座っていた、50歳前後の恰幅の良い赤ら顔の男が立ち上がって、司会者からマイクを受け取り話し始めた。

「佑樹君、和美さんご結婚おめでとう。先程司会者の方がウルトラマンが怪獣を倒した事を言っていました。何と新郎の三迫佑樹君

も怪獣をやっつけた事があるのです。皆さんもご存じと思いますが、佑樹君の趣味は登山で……」

一月前の佑樹との登山を思い出して、新婦の大村和美おおむらかずみは顔を伏せた。

あれは、三迫佑樹とのクリスマス婚を一ヶ月後に控えた11月最後の休日に、和美は佑樹に誘われてN県に登山に行った時の事だった。最初は登山道を登っていたのだが、山頂が近付いて来た頃、佑樹が絶景を見に行こうと私の手を引っ張って登山道を外れて行ったのであった。

登山道を外れて30分も歩いただろうか？！突然樹木が途切れて、眼も眩むような崖の上に出た。

そこには、日本と思えない絶景が広がっていた。

崖の上から下までは数百メートルは在り、対面する山々は彼方から紅葉を映し出している。

そんな崖下を覗いていた佑樹が、二匹の怪獣を見付けたのである。

佑樹に手招きされるまま、恐る恐る崖下を覗き込むと、遙か眼下に母子らしき大小二匹の怪獣がいて、人間で云う母親が、赤ちゃんに乳を与えているような微笑ましい光景であった。

何を思っつか佑樹は、大きな石を抱えて来て私が止めるのも聞かずにその石を崖下に向かって放り投げた。

石は行き良いよく崖下に向かって転がって行き、途中で大規模な土砂崩れを巻き起こし、母子怪獣おやこを容赦なく呑みこんでいった……

・土砂からのぞいている母親の尻尾だけが、苦しそうにのたうちまわっている。

しかし、その動きも次第に弱弱しくなり、数分後には完全にその動きを止めた。

佑樹はその光景を見ながら狂喜乱舞している。

和美は佑樹の知らない一面を見た気がした。

”私はなぜこの男と婚約したのだろう”

和美は手で下腹部を押さえながら佑樹から顔をそむけるのであった。

「……と云う訳で、和美さんのお腹の中には、新しい命が宿っているのです……。」

万雷の拍手の中、我に返った和美は、顔を赤らめ静かに眼を伏せた。

地底怪獣を倒したその夜。

深夜の街を、郷と上野がマットバイクでパトロールをしている。

「おい郷、お前少し無茶をしすぎだぞ。」

運転している郷に、助手席の上野が真顔で言った。

「はぁ……すいません。」

郷には、地底怪獣との戦いの時の事を言っているのは分かっていた。

「命は一つしかないんだ、もっと大切なるよ……。」

上野の言葉と同時に、郷はバイクを急停止させた。

「どうした郷?!。」

急に車を止めた郷に、上野は聞いた。

「気のせいかもしれませんが、そのビルの路地に何者かが隠れたような……!?!?。」

マットシートを片手に郷が車を降りる。

上野も後に続く、街全体が深い眠りに入っているようかのようになり、二人の他に物音一つしない。

「郷、俺は反対側の路地にまわる、何者かがいたら挟み撃ちだ。」

「了解!。」

二人の隊員は、左右の路地に用心深く入って行った。

ビルとビルの中の細い路地を、マットシート片手に用心深く郷が進んでいる。

”ガッツ・・・”

10メートル程前方の闇の中から物音が聞こえた。

「誰かいるのか?!」

郷はマットシユートを構えた。

前方の闇からは何の返事も無い。

郷が一步進んだ時。

突然、闇の中から光線銃から放たれたと思われる光線が、郷の左頬をかすめていった。

何者かが暗闇を逃げる気配がする。

「何者だ?撃つぞ・・・。」

恐怖を感じながら郷はマットシユートを乱射した。

「ギヤア~~~~!!」

はるか前方の闇の中から、悲鳴が轟いた。

郷が放ったマットシユートが何者かをとらえたらしい。

用心深く、闇の中を郷が進んでいくと、前方の闇の中で何かがつくめいている。

郷は制服から出した照明を照らした。

照明の中に照らし出されたのは、左腕を押さえながら苦痛に顔を歪めて、路地に倒れこんでいる”上野”であった・・・。

「上野隊員・・・何故貴方が私を殺そうとするのですか?」

郷は首を左右に振りながら、信じられないといった風に声を絞り出した。

「な・・・何を・・・言っているんだ・・・ごう・・・俺は・・・何も・・・してないぞ・・・お前が急に・・・マット・・・シユート・・・を・・・乱射し・・・て来たんだ・・・。」

苦痛に顔を歪めながら、上野が途切れ途切れに言った。

「・・・私が?じゃあ私を撃つて来たのは何者で、一体何処に消えたんだ!?!」

郷は、激痛で気を失った上野を抱きかかえたまま、暗闇やみの中で茫然と立ちすくしているのであった。

地球防衛庁所属のM・A・Tは軍法会議を開き、郷 秀樹隊員を上野一平隊員に対する発砲を誤射と認め、減俸三カ月。訓告処分に処すと発表した。

この発表に伴い、地球防衛庁佐竹参謀は今期限りでのMAT極東支部の解散を発表したのであった。

終章 1 疑心

(完)

終章 2 暗鬼

地球防衛庁所属のM・

A・T極東支部解散のニュースは、国民に衝撃を与えながら日本中を駆け巡っていた。

尚、地球防衛庁は、来年度から発足させまいとする新組織の準備を水面下で進めていた。

この事は上層部しか知らされてなく、無論、MAT隊長はじめ隊員たちには知る由もなかった。

隊員同士での撃ちあいと云う大失態を演じたMATであったが、解散という事実により、郷、上野両隊員はじめMAT隊員たちの心は、一つに成りかけていた。

その後はウルトラマンの活躍等もあり、ストラ星・グロテス星・ズール星からの侵略を何とかしのいでいた。

そんな折の M・A・

T極東支部解散まで一カ月を切った三月初旬、東京上空に円盤群が飛来した。

”我々は、大マゼラン星雲のマリキウス星からやって来た。この地球をマリキウス星の植民地に決め、我々が支配することにした。地球人には二つの選択肢がある、一つは無条件降伏で我々の支配下に入り、奴隷としてこの地球に住み続けるか、もう一つは、この地

球を出ていくかの二つだ。

間違っても、我々を攻撃してはならない。我々は地球人の云う最終
爆弾^{ゲ・ドン}5機を搭載している。全て爆発すると、日本はもちろん、地球
の半分近くは壊滅状態になるだろう。では、地球時間で24時間後
また連絡をする。”

岸田長官はじめ佐竹参謀がマット作戦室に現れたのは、地球防衛庁
に円盤からの通信が入って凡そ三時間過ぎた頃の事であった。

「・・・と云う事だ伊吹隊長。マットとしてはどう思う？本当にア
ーマゲ・ドンを搭載していると思うか?!」

一通りの説明のあと、岸田長官自ら伊吹に話しかけた。

「数ヶ月前にマットロンドン支部からの報告後、連絡は来ておりま
せんが、マーチン隊員が五機の最終爆弾^{アーマゲ・ドン}を搭載して逃亡したのは事
実です。」

「そんな事は分かっている。隊長の意見を聞いているんだ。」
長官の隣にいる佐竹参謀がイライラして言った。

「自分の考えだけを言えば・・・事実だと思います。」

「その根拠は？」と長官。

直立不動で、後ろ手に腕を組んだままの体勢で伊吹は続けた。

「マットロンドン支部の事件が、外部に洩れたとは思えません。」

マリキウス星人は、おそらくその最終爆弾^{アーマゲ・ドン}を持っているのだと思わ
れます。」

「やはり隊長もそう思うか!？」

岸田長官は顔を曇らせ、「また連絡する」と言い残し佐竹参謀を従
えて作戦室を出て行った。

地球防衛庁が、無条件降伏か円盤群を攻撃するかの答えが出ないまま、時は刻一刻と過ぎ去って行くなか、マットは熱く燃えていた。

「隊長！攻撃しましょう。」

岸田が意を決したように叫んだのをきっかけに、他の隊員たちも口々に同調した。

「そつだ。ここは攻撃しかない！」

「どうせマットは解散するんです。私たちの力を見せてやりましょう。」

「新型冷凍爆弾で奇襲攻撃してみたら、どうでしょうか？」

椅子から立ち上がりざまに郷が伊吹を見た。

「そつか、その手があったか！？隊長、瞬間冷凍すれば最終爆弾をアーマゲドン仮に搭載していても大丈夫なのでは！？」

南も身を乗り出して来た。

伊吹は作戦室の椅子に腰をおろして、腕を組んだまま目を閉じて動かない。

「隊長！時間がありません決断をして下さい。」

岸田の言葉に、全隊員が伊吹を見た。

その時、マットのコンピューターが入電文をはじき出して来た。

丘が立ち上がり、コンピューターの前に行く。

「隊長、マトロンドン支部から入電です。」

興奮を隠せない丘は電文を読み始めた。

「マトロンドン支部から、〇時〇分世界各地のマットに通信いたします。マトロンドン支部で数か月前に起きた、マーチン隊員がヤン隊長を射殺して逃亡した事件の調査結果を発表します。その後の調査により、ヤン隊長はマリキウス星のスパイであった事が判明。その事を偶然知ったマーチン隊員を、ヤン隊長が射殺しようとして、逆に射殺されたものであり。その後、マーチン隊員はヤン隊長が極秘裏にアーマゲ・ドンを五機搭載していたスペースアローに乗り込み、マリキウス星に体当たりして自爆したものと恐れられ、マトロ口

ンドン支部ではアーマゲ・ドン五機の爆発を確認しました。壊滅状態なり、犠牲に成ったマリキウス星の一般市民に哀悼の意を表すと共に、マーチン隊員は立派なマットの戦士であった事をロンドン支部の誇りにしたいと思い、ここに発表します。尚、今極東支部上空に飛来しているのはマリキウス星ゲリラ部隊だと思われ、以上の理由から、アーマゲ・ドンの搭載など皆無だと思われまます。」

丘は読み終え伊吹の顔を見た。

「・・・出撃する!!」

伊吹隊長の怒りに満ちた声がマット作戦室にこだました。

マリキウス星の地球侵略計画は完璧なものであった。しかし、一人の勇敢なマットの戦士により、その計画はもろくも崩れ去り、マリキウス星は壊滅状態に成った。

そして今、最後の作戦も、真実を知ったマット極東支部とウルトラマンにより、マリキウス星の野望は完全に潰^{つぶ}えてしまったのであった。

郷はベッドに横たわり、マリキウス星人との戦いを思い出していた。あの時私は、自分の周りを飛行するマットアローにスペシウムを撃とうとしていた・・・。”

闇の寝室。

郷の頭の中を言い知れぬ恐怖が駆け巡っていた。

「ウルトラマン・・・お前は地球病にかかっているのだ。その昔セブンは身体^{からだ}を蝕まれ、お前は精神を蝕まれている。このまま放置していると、地球人と闘うはめに成るぞ・・・。M78星雲に帰る時が来たのだ。」

郷はベッドに飛び起きた。

「ゾフィ・・・にいさん?!」

郷は辺りを見回したが、闇が寢室を覆っているだけで、ゾフィーはおろか何者の気配も感じられない。

郷秀樹は闇の中を走っていた。

何者かが、闇の中から私を狙っている。

郷のマットシユートを持つ手に汗がにじんで来ていた。

”これは、いつもの悪夢^{ゆめ}・いつの間にか私は眠ってしまったのだ。

”

郷の心がそう叫んだ時、

闇の中から一筋の光線が郷の頬をかすめて行った。

反射的に郷はマットシユートを撃った。

右前方の闇の中で、何者かが倒れる音。

郷がゆっくり近づくと、そこには悶絶死している南隊員の姿があった。

”・・・これは、いつもの悪夢^{ゆめ}だ・・・。”

郷はまた自分に言い聞かせた。

”仲間を殺したな郷！”

”何故南隊員を撃ったの。”

”俺を撃つたのは、誤射ではなかったのか?!”

”お前は銃殺刑だ・・・!”

”そうだ、死刑だ!”

”死刑よ!”

闇の中から、マットの隊員たちの声が次々に襲ってくる。

「うわゝ、やめてくれ・・・。」

郷はベッドの上に飛び起きた。

「夢か!?’

ベッドの上で荒い息を繰り返しながら、郷は暫く呆然としていた。

「私はどうなってしまったのだ!?’

郷は呟きベッドにまた倒れこんだ。

眼を瞑ると先程の悪夢が思い出されて来た。

”ガチャリ”

その時、部屋のドアのノブが回され人影が忍び込んできた。

郷は、息をひそめてその人影を監察すると、どうやら村野ルミ子が合鍵で開けたらしい……。

村野ルミ子らしき人影は、ベッドに近づき郷の寝息を確認すると、ネグリジエの胸元から黒光りのする銃を取り出し両手に構えた。銃を持つ村野ルミ子の両手が震えている。

「どうした？！なぜ撃たない……パラサイト星人。」

郷は眼を開け村野ルミ子を見た。

「……いつから気付いていたの？！ウルトラマン。」

村野ルミ子は後ずさりした、その両手にはまだ銃が握られている。

「ルミ子さんを殺して、身体を乗っ取ったのか？！」

郷はその問いを無視して、逆に聞いた。

村野ルミ子は銃を下げながら話し始めた。

「私は、生物の自我に潜り込みその生物の身体からだを操縦あやつるのです。今は、身体は村野るり子ですが、脳はパラサイト星人の私です……分かりやすくいえば村野ルミ子の自我から私が離脱はなれた時、村野ルミ子は復活しますが、私の方が死んでしまうのです。」

「何のために、そこまでして私を殺そうとするんだ？」

「バット星がウルトラの星を征服するための序章なのです。でも、私には貴方を撃てなかった！」

「何故？」

「それは、この身体が郷 秀樹を愛していたから、自我を乗っ取っている私の意志までも、貴方への愛へと変えたのかもしれない。その昔、パラサイト星はバット星の支配下に落ちたの、肉体を持たないパラサイト星人は、それ以来バット星が送りこむ生物兵器に成ってしまった。」

そう言っただけでパラサイトの村野ルミ子は力無くうなだれるのであった。「バット星人か……。」

「そう、私が貴方の暗殺に失敗したら、ゼットンを引き連れて貴方を倒しに地球にやって来るわ。そして、バット星連合艦隊がウルトラの星に向かうのよ。」

「私はもう戦えない・・・病気なんだ。」

郷はポツリと呟いた。

「えっ。」

「暗闇の中の鬼が、私の精神をむさぼり喰っているそうさ・・・」

・さっきは一瞬、貴女に撃たれてもいいと思った。」

パラサイトの村野ルミ子は両手で郷の身体を自分の胸に引き寄せた。銃はもう、その手には握られていない。

「可哀そうなウルトラマン！何も考えずに私の胸の中で眠りなさい。私がその鬼を殺してあげる。そして、目覚めた時貴方はゼットンと戦うのよ。」

全てを忘れ、郷は久しぶりに熟睡した・・・

「・・・次郎君の存在を、ルミ子さんが気づかなくなった日からだ。」

「次郎君？ナツクル星人に皆殺しにされた坂田三兄妹の末っ子？」

「そうさ、しかし次郎君だけは、私の力で親近者にだけは生きていくように思わせていた。村野ルミ子には、次郎君の姿が見えて、共に行動をしていたんだよ。」

「そうだったの、次郎君だけは亡くなくても、みんなの心の中に生かされていたのね・・・私は貴方にもルミ子さんにも負けた。」

翌朝。

パラサイトの村野ルミ子の胸の中で目覚めた郷は、全てが吹っ切れていた。

もう、ウルトラマンの精神を食い荒らす鬼はいない。

「ありがとう。私はこれから最期の戦いに行つて来る。」

郷はパラサイトの村野ルミ子に敬礼をして部屋を出て行つた。

「さようなら、ウルトラマン・・・。」

パラサイトの村野ルミ子はそつと呟いた。

バット星人はマツト基地に潜入しマツトは大混乱を起こしたが、最後はゼットン、バット星人ともにウルトラマンの前に敗れ去り、地球は救われた。

とある海岸・・・郷は一人歩いていた。

前方に村野ルミ子と次郎君が佇んでいる。

「郷さん、私・・・どうしたのかしら、気がついたら次郎君とここに居るの。」

郷は微笑み、右手を挙げてウルトラマンに変身した。

「シューワツチ」

ウルトラマンはバット星連合艦隊を迎え撃つため、ウルトラの星に帰るのだ。

「郷さん。ウルトラ五つの誓い、一つ、腹ペコのまま学校に行かないこと・・・。」

次郎君が、海岸を泣きながら走っているのが見える。

「郷、元気だな。」

「郷さん、早く帰って来てね・・・。」

海岸線で坂田 健とアキが手を振っている。

ウルトラマンは、我が目を疑いながら大きく旋回すると、敬礼をして大空の彼方へと飛び去って行つた。

「・・・さらば地球・・・私が愛した人間たちよ・・・！」

眠れウルトラマン

(完)

終章 2 暗鬼（後書き）

最後まで読んで下さった皆様、ありがとうございました。自分としては、もう少し違うラストを考えていたのですが、上手くいきませんできました。

これで、ファンフィクションは卒業したいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2891n/>

眠れ！ウルトラマン

2011年10月5日03時52分発行